武蔵野日曜聖書講筵

# ピステイ
## ――ヘブル書第11章1～16節――

１９８０年12月14日
小池辰雄

相手をまことととする　信は現　信は望まれているところの現実　信は霊的実証　霊視・霊聞・霊触　信はキリストの絶対現実の中に信入　信に在って　献身と手柄　宗教復興　顧みられざる神の顧み　慕うところは天にあり　民主主義　祈り

【ヘブル11】

1それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。2古えの人は之によりて証せられたり。3信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顕るる物より成らざるを悟る。4信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に献げ、之によりて正しと証せられたり。神その供物につきて証し給えばなり。彼は死ぬれども、信仰によりて今なお語る。5信仰に由りてエノクは死を見ぬように移されたり。神これを移し給いたれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを証せられたり。6信仰なくしては神に悦ばるること能わず、そは神に来る者は、神の在すことと神の己を求むる者に報い給うこととを、必ず信ずべければなり。7信仰に由りてノアは、未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏みてその家の者を救わん為に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。8信仰に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵い、その往く所を知らずして出で往けり。9信仰により異国に在るごとく約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクとヤコブと共に幕屋に住めり、10これ神の営み造りたもう基礎ある都を望めばなり。11信仰に由りてサラも約束したもう者の忠実なるを思いし故に、年邁ぎたれど胤をやどす力を受けたり。12この故に死にたる者のごとき一人より天の星のごとく、また海辺の数えがたき砂のごとく夥多しく生まれ出でたり。

13彼等はみな信仰を懐きて死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙にこれを見て迎え、地にては旅人また寓れる者なるを言いあらわせり。14斯く言うは、己が故郷を求むることを表すなり。15若しその出でし処を念わば、

**帰るべき機(おり)ありしなるべし。16されど彼らの慕う所は天にある更に勝(まさ)りたる所なり。この故に神は彼らの神と称えらるるを恥とし給わず、そは彼等のために都を備え給えばなり。**

## ●相手をまこととする

ヘブル書11章というのは非常に特色のある章ですね。

**1それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実(まこと)とするなり。**

「信仰」というものを、定義したというわけではないですけれども、いろんな言い方がありましょうけれども、非常に大事な言葉です。定義ということは、本当の真理はできないんです。これはゲーテが『ファウスト』の中でも言っている。概念的な規定をしてしまうと、はみ出てしまうからと。

「信仰」という言葉は、ギリシア語では

「ピステス」

という言葉ですが、今日ここに書いた

「ピステイ」（信に在って）

というのはそれの三格です。ヘブライ語だと

「エメツ」

になる。「アーメン」という字からくる。

「まこととする」

こと。神さまと人間との関係で、一番根本になる関係の言葉は、何といっても、この「信」なんです。ピステス、アーメン、エメツです。「まこと」といっても、こっちの「真(まこと)」じゃない。こっちの「信(まこと)」です。もちろん、この「真」も入るんです、この

「信実(まこと)」

の中に。入りますけれども、こっちの「信」が主である。

「相手をまこととする」

ということ。

「自分の気持が真実である」

というのはこっちの「真」です。けれども、

「相手をまこととする。そしてまた、我と汝との関係が変わらない、移らない」

というのが「信」です。

私がしょっちゅう言うのに、

「相手（神さま）をまこととする」

ということを100％にやったのがキリストだけです。我々はなかなかそれができない。

「相手を100％にまこととする」

のは――100というものが全だとすると――相手に100をあげると、こっちは0になるわけです。

「相手は98だが、こっちも2である」

なんていうのは信ではない。

「神さまは98で、こっちも2くらはあるよ」

なんていうのは信ではない。本当の信は、

「神さまを100として自分を0とする」

こと。100は無限大（∞）を表す。相手を無限大として、こっちは0。

「0＝∞」（ゼロ・イコール・無限大）

これが「信ずる」ということです。

## ●信は現

**「信仰は望むところを確信し」**

という。「確信する」という字は、ここは「確信する」という動詞になっているけれども、原文では名詞なんです。英語でいうと、

「リアリティー（現実）、サブスタンス（実体）」

という字で、現実、実質です。

「現実である、実質である」

ということ。

「ライフ　イズ　リアル、ライフ　イズ　アーネスト」

（生くるは現実、生くるは厳粛）

という。

「生くることはリアルである」

というロングフェローの詩がありますね。「現実である」という。実なんです。現（うつつ）にして実なるもの。あるいは、実質。「信仰」の「仰」の字はやめてしまった方がいい。「信」でいい。

「信は現である」

ということ。もし日本語でいうなら、「現（うつつ）」です。

「信仰は即ち現実なり。信は即ち現なり」

と。

「信は現なり」

と私はよく言うでしょ。

「望むところのものの現実である」

と。「望むところ」という字も名詞なんです。

「およそ望まれてあるところのもの」

という意味で、

「信とは望まれてあるところのものの現実である。望まれてあるところのものを即ち現実としていることだ」

という。もうひとつ言うと、

「祈られているところの事態を現実としている」

ということです。「望み」というものは上から来るんですよ。こっちからの願望ではない。望みは神さまから来る。神の本願。本願の現実であると。おもしろいね。

「信は本願の現実なり」

と。神の本願だから、必ず成就するんです。

「成就する事態を現（うつつ）として受けとることが信である」

と。正にその通りですね。「望むところのもの」というのは、

「望まれてあるところのもの」

です。むしろ、これは受身なんです。主観的に望むのではないですよ。望みをいただいているところのもの。望まれてあるところのものの現実であると。

「信は希望の現実なり。信は望の実なり」

と。「信・望・愛」というね。信は望の実である。信は望の現である。望の現（うつつ）である。非常に深い言葉です。定義でも何でもない。それは正に内実であります。

それでなければ、力は来ないですよ。そういう現でなかったら、信なんて言ったって。

「まぁ分からないけれども、信じておきましょう」

なんて、そんなものは信仰でも何でもない。祈りがそうなんです。

「祈られているものは既に得たりとせよ」

という。

**「祈りたることは既に得たりとせよ」**

と、キリストが言っておられる。祈りも、望みも、信も、これはみんな現（うつつ）なんです。永遠の現実です。もうそうなると、死は突破されているんですよ、死の世界は。

## ●信は望まれているところの現実

お釈迦さんが、老病死というものを非常に憂いて、問題にして、そうして難行苦行を六年間やった。けれども、ついにそれは徒然（いたずら）であった。もうヘトヘトになって、骸骨みたいになって、もうどうにもならん。林から出てきて、川の水の中にからだを浸して、六年ぶりに身体を洗ったんだよな。そしてやっと這い上がってきたら、通りがかった乙女が牛乳を持っていて、それをくれた。お釈迦さんがあとで、

「これは忘れることのできない供養であった」

と言った。「供養」という言葉はそこから来ている。お釈迦さんがその時に使った。それで

息を吹き返した。そして今度は、菩提樹の下で冥想して、大悟を徹底したわけですね。

だから、悟りの世界というのは大変なんだ。ところが、信の世界は簡単なんです。仏教はどちらかというと、悟りの世界です。迷いから醒(さ)めよ、無明の世界から光明の世界に醒めよという。

プラトンの「イデヤ」の世界へのあこがれ――これを「エロース」という――そのイデヤの世界へのあこがれも、やはり、向こうからの

「思い出し」

というような角度からつかまえて、やっと宗教的なあれを得たんですけれども。「エロース」という言葉は単に肉欲的なことをいうのではない。追究してやまない衝動をみんな「エロース」というんです。

ところが、この「信」は、浄土真宗は非常に「本願」の角度がある。「汝の御意」というのが本願ですからね。キリストが仰った、

「**汝の御意(みこころ)を成させたまえ**」

とは、

「本願成就したまえ」

と。そういうことですよ、あれは。「御意を成させたまえ」なんて、体裁に祈ったってダメなんだ。「本願を成就し給え」というのは、本願は必ず成就する。即ち、

「望まれているところの本願は成就する」

と、現として受けとる。それを信という。

もう私はこういうことをしゃべっているうちに、グーッと生命が来てしまう。もの凄い力がくる。あなた方は聴きながら、入っているでしょうね。

「そうですか」

じゃないよ。

「信は望まれているところの現である」

ということ。

「**信仰は望むところを確信し**」

なんていう言い方をされると困るんだよ。

「私はまだなかなか確信ができない」

と、こうくるでしょ。くたびれてしまうよ、そんなのは。この「確信し」なんていう訳はよした方がいい。

「**信は確信し**」

なんて言ったって、おかしな話だ。

「信は望まれているところの現実である」

と、直しておいてください。

●信は霊的実証

**見ぬ物を真実（まこと）とするなり。**

と。これも困ったな。「見ぬもの」も、

「見られていないところのもの」

という受身です。

「見られざるものの証明、証（あかし）である」

ということ。「エレンコス」は「証明、証」ということ。言葉がもっと強いんです。実証である。英語でいうと、「エビデンス」です。

「見られていないところの、見られざるところのものの、実証である、証拠である、証拠である」

と。同じことを別な言葉で言うんです。真理はよくそういうようにいう。漢文でもそうでしょ。旧約の預言者の言葉が非常にそれです。パラレリスムス、並行用法という。

さっきの言葉は、現実とか、実質とか、実体とかという。

「信は、望まれているところのものの現実、実体である」

と。今度は、

「見られざるところのものの証拠である」

と。ドイツ語でいうと、「ベバイス」とか「ナッハバイス」とかいう。英語だと「プルーフ」です。

見えない、見られざるもの。それは見えないばかりではない。聞こえない。およそ五感に訴えてこない。

「五感に訴えざるところのものの、五感では受けとられざるところのものの、実証である、証拠である」

と。だから、もう霊的な現実ということがわかる。

「信は霊的実証なり」

と、そう言えばいいことです、はっきり言えば。即ち、五感ではダメなんだ。

**「未だ見えざるところのもの、未だ聞かれざるところのもの」**

なんて、イザヤ書にもあるでしょ。

●霊視・霊聞・霊触

ところが、おもしろいね。ヨハネ書簡第一書の1章1節に、

「1**太初（はじめ）より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手触りし所のもの、即ち生命の言につきて**」（ヨハネ一1・1）

なんて、全然反対のことを言っている。

「太初（はじめ）より有りし所のもの」

とは何ですか。原始から実在していたところのもの。そして、

「目で見、耳で聞き、手にて触りし」

なんて。

これは全部、霊視し、霊聞し、霊触しているんです。五感で見たり聞いたりしているのではないです、この「生命の言」というのは。五感で見たり聞いたりして分かったのなら、キリストが地上にいたときにみんなは分かるはずです。ところが、キリストをちっとも分からない。彼らはキリストをよく見てました。また、言うことも聞いてました。キリストと握手もしたでしょう。抱きつきもしたかもしれない。けれども、ダメなんだ。本当に見てもいなければ、本当に聞いてもいない。

「今に、御霊が来たら、お前たちは私が言ったりしたりしたことが分かるぞ」

と。だから、霊視、霊聞、霊触しなければ分からないのが「生命の言」なんです。

けれども、私たちは、そういっても、五感があるのだから、五感がひとつの手段となる。手段とはなっても、そこを通してする。私たちは聖書を目で見ますよ、文字を。目で見る。目で見るけれども、それは確かに五感的な感覚だ。しかしながら、五感的な感覚を通して今度は、霊視しなければいけない。霊視しないから、いつまでたっても「聖書研究」なんてやったってダメなんだ。霊視しないで研究をやっているから。

「ギリシア語やヘブライ語ができればより聖書が分かる」

なんて思っているからダメなんだ。ギリシア語やヘブライ語の奥の言葉です。

「信は見えざるところの、五感に触れざるところのものの実証である、証拠である」

と。全くそうです。見えざるものを見ているというんです、信というものは。信は見えざるものを見、聞こえざるものを聞き、触れざるものに触れているという。

## ●信はキリストの絶対現実の中に信入

私はヘブル書を前にも講義したけれども、今日のようなこれだけの深さでは言いませんでした。そういうんですから、11章1節はもう大変な節です。証拠なんだ、はっきり。こっちに受けとってるんだから、信というのは。これは、申し上げているとおり、信入しているんだから、この信は。

「信とはキリストの中に信入することである」

と。こっちで

「仕方がないから、分からないけれども信じておこう」

なんて、そうじゃないです、信仰というのは。

自分をキリストという、神さまという――これはもの凄い桁違いの現実、霊的な絶対現実です――この絶対現実の中に信入すれば、証拠に決まっているじゃないですか、何よりも。

「私はキリストの中に信入して、懐の中に入ってしまったら、もの凄い絶対現実だ

から、そんな目で見たり耳で聞いたりしているような世界じゃない。その中に入ってしまっているから、もうはっきり来ています」

と。だから、見えざるところの、五感に触れざるところの現ではないですか。これは大変な言葉です。そこまで掘り下げて読んでないものな、大体が…（異言）…。そういうことです。

「信は望まれたるところのものの実体にして、現実にして、五感に触れざるところの、見られざるところのものの証拠である」

と。確証と言ったっていい。「確」の字を使いたければ、これは「確証」なんだ。「確信」ではない。「信は確信」なんて言っても何のことかわからない。証拠であります。

それは「信入」です。絶対現実に信入しているんだから、信というのは。キリストの絶対現実の中に自分を投げ入れているんだから。

「主さま！」

と叫べば、直ちにその中に入る。

「主さまと叫べば、わがうちに既に主は来たり給う」

と。御霊は来たりたもう。

「南無と言えば阿弥陀来にけり、この一つ身を我とは言わん仏とは言わん」

と。これは素晴らしい言葉です。その通りです。「南無阿弥陀仏」の

「南無と言ったら阿弥陀がやってきた。この一つ身を私と言おうか、仏と言おうか、一如の世界でござる」

と。これが信の現実です。あの言葉は私は大好きだ。問題ないですよ。その世界に本当に入って、人のために祈ってあげれば直ちに働くんだ、力が。

## ●信に在って

**2 古（いにし）えの人は之によりて証（あかし）せられたり。3 信仰によりて我等は、**

「信仰によりて、信仰によりて」

と畳みかけて書いてある。それがこの「ピステイ」なんです。「ピステス」の三格で、ただ「ピステイ」と書いてある。ただ一字です。これは、

「信に在って」

です。「よりて」よりも「在って」の方がいい。「在信」というのがこの「ピステイ」です。「カタ」という言葉が使ってあるところもありますけれども、「ピステイ」という三格が多い。「信仰によりて」というのは「信に在って」ということ。

**3 信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物より成らざるを悟る。**

はい、その通り。ヨブ記にも書いてある。

**「神の霊により、息吹によって成った。また、神の声によって成った」**

と。「もろもろの世界」と訳してあるが、「世界」ではないよ、「代」という字です。時代のことです。どの時代もこの神の言によって造られたと。だから、ランケが、

「世界の各時代は神に直結する」

なんて言ったのは、これと似たような気持です。

「神の霊言によって造られ、見ゆる物の顕るる物より成らざるを悟る」

という。

「見えざるところの物の、霊的な物の、神の息吹によって、霊気によって成った」

ということ。

## ●献身と手柄

**4信仰に出りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に献げ、之によりて正しと証せられたり。神その供物につきて証し給えばなり。**

さぁ困ったね、これは。カインとアベルのところをちょっと開こうかな。創世記4章、

「1アダム其妻エバを知る。

肉体的に交わることを「知る」という。

**彼孕みてカインを生みて言いけるは、我エホバによりて一個の人を得たりと。2彼また其弟アベルを生めり。アベルは羊を牧う者、カインは土を耕す者なりき。3日を経て後カイン土より出る果を携来りてエホバに供物となせり。4アベルもまた其羊の初生と其肥たる者を携え来れり。エホバ、アベルと其供物を眷顧みたまいしかども、5カインと其供物をば眷み給わざりしかば、カイン甚だ怒り且其面をふせたり。**

カインは怒ってしまった。

「私も一生懸命で耕して一番善いものをお供えしたのに、アベルの方の献げ物を顧みて、私の方を顧みないのは何だ」

と。これは、

「宗教史的にいうと、農耕民族と遊牧の民とあって、遊牧の民の方がこのときにやはり神さまに選民として選ばれた云々」

というような解釈をするわけです。もちろん、これは物語ですからね。大体、アダムとイブだって、これはみんな物語だから。

「物語を通してどのような真理が開示されているか」

ということが聖書の見方ですから、間違わないでください。

それはカインが怒るのも無理はないんだよ。

「なぜ、私の方は顧みてくださらないのか。不公平だ、神さまは」

と。ところが、神さまは、

**6エホバ、カインに言いたまいけるは汝何ぞ怒るや、何ぞ面をふするや。7汝若し善を行わば挙ることをえざらんや。若し善を行わずば罪門戸に伏す。彼は汝を慕い汝は彼を治めん。8カイン其弟アベルに語りぬ。彼等野におりける時カイン其弟アベルに起ちかかりて之を殺せり。」（創世記4・1～8）**

なんて、えらいことになってしまった。カインは善きを行なったんだ、相対的にいって。ところが、不公平な扱いをされたから怒ってしまったので、

「神さまの言うことは本当は論理にあわない」

と、カインは言いたいところだ。これをどうしますか、この物語を。それで、

**「信仰により」**

という。

「アベルは信仰によったが、カインは信仰によらなかった」

というからね。カインも一生懸命でやりました。アベルもね。ところが、アベルは顧みられて、カインは顧みられなかった。だから、これは怒って、とうとう殺してしまった。神さまは、

「お前は善いことをしたならば、そんなわけはないじゃないか。怒ることはないじゃないか」

と。カインの中には、神さまの目から見ると、この信がなかった。こっちは不信であると。これは文字からはわからないですよ、この記事からは。なぜ、カインが不信であるかは。心の中を見たもう神には、カインは不信であった。即ち、

「不信であった」

というのは、この献げ物をなにか自分の非常な手柄だと思った。こっち（アベル）は手柄どころじゃない。自分そのものを献げるという気持が信であった。こっちは献身である。身を献げている。即ち、「犠牲」というものは献身的なものであるから。

「犠牲において自分を献げている」

ということが信である。

カインは、野菜において自分を本当に献げている信があればよかったんだけれども、どうも手柄のような気持だったんじゃないですか。そうすると、神さまには、

「それは外側は善き行いであったけれども、内側は本当の信ではなかった」

と。これは神の目に見えたので、人にはわからない。

もし、彼が本当に野菜をもって献げいて、本当にこれもまた献身であったとしたら、

「アベルはその時に受けとられたが、私はもう少し待とう」

と、

「顧みられざる顧み」

というところを、もし、カインが受けとったならば、カインの信はアベル以上ですよ。ア

ベル以上に素晴らしいことになる。神さまに顧みられないときになお神を信じぬいたならば、その信はアベルよりも素晴らしい信になる。

「あぁ、お前は先に喜ばれたか。いいよ、俺はまた待っているよ」

と。それだけの兄貴だったら、えらい兄貴です。ところが、

「なんだ、お前が喜ばれて、俺は喜ばれない。けしからん」

と言って殺してしまったから。これはアダム・イブの楽園喪失から生まれた子どもだから、もう既に罪の要素が入っているね。この結婚が民の神に対する不従順から始まっているから。始めは従順だったけれども、蛇にやられて、蛇の妬みにあって、妬みの霊が入ってきてしまった。これは

「妬み争い」

というやつです。この罪は特に妬みは女性、争いは男性に多い。

## ●宗教復興

それで仕方がないから、アベルとは別に今度は、アベルの代りにセツの族（やから）が――ずっとあとに出てくるエノクがそうです――このセツの族から出てくる。創世記の話を始めると大変だから、よそう。

だから、いいですか、現象的にはどうも不公平にみえるようなことがありますよ、世の中にいっぱい。矛盾だらけの不公平だらけだ。しかし、神を信ずるというのは現象によるのではない。現象の奥の世界です。

神の本願は自分には今はわからん。わからんけれども、本願であるかぎり、必ずこれは最善である。地上は惨憺たる生涯でさしつかえない。しかし、

「惨憺たる生涯の中に神さまの愛が逆にいかに深いか」

ということを受けとっていかないと。

それは、「いかに深いか」ということを受けとるのは、いいですか、観念じゃないですよ。だから、そこが聖霊なんです。聖霊を受けとっていなかったら、ダメなんだ、いくら「神の愛」なんて言ったって。御霊が来てしまったら、これは何ものとも代えられない。力が来ているから、神的な力が。どんなものにも負けませんから、この聖霊は。もの凄く豊かな力強い、広大無辺なものです。

もうそれは話にならない。私の「無の神学」はそれを語りますから。もう言いようがないから、私は「無」と言っているだけのはなしで、無いんじゃないですよ、この「無」というやつは。自分の側は完全に無いですよ、十字架で徹底的に。「無」と言おうが、「空」と言おうが、何だっていいよ。

その気合をこないだ阿蘇の集会でやったものだから、あのご連中が驚いて喜んでしまった。

「もうすっかりぬけました」

と、幾人かの伝道者に本当の力が入ってきたらしい。昨日も手島君の長男がやってきて、本当に心から喜んで感謝してくれました。

「また、将来も、先生、よろしくお願いします」

と。私は自分が何もないから、「はい」とはっきり言えるんです。自分があったら言えませんよ。もう限りないものが働くから、

「はい、結構です」

と。それが分かってくれないのが、無教会というパリサイなんだ。手島・小池に流れていたものが本当にいつ分かってくれるか。

だから、キリストの直弟子のパウロ、ヨハネ、ペテロ、彼らがひっくり返されたあとの素晴らしさが使徒行伝です。あれが本当に、

「信は即ち現（うつつ）なり」

の証拠の世界です。ヘブル書11章1節を註解しているものは何かと言ったら、使徒行伝なりと言ったらいい。使徒行伝がこのヘブル書11章1節を証している書であります。今日初めて言ったよ。本当にそうだよ。そして、皆さんが使徒行伝のまた先を進んでいく。

まだ、「第二の宗教改革」では弱い。

「宗教復興」

です。「文芸復興」「ルネッサンス」というね。「レ・レフォルマツィオーン」だ。キリスト教は第二の宗教改革を必要とする。仏教も、鎌倉仏教の再興をしなければならん。ありがたいね、御霊の世界はもう恐れなくそういうことがはっきり言えるから。

## ●顧みられざる神の顧み

カインの失敗を、もうひとつ奥でもって、

「顧みられざる神の顧み」

というものを受けとるような信にならなければダメです。これは、聖霊が来ていると、はっきりそれができる。

**彼は死ぬれども、信仰によりて今なお語る。**

と。アベルは今でも語る。生きているからね。死んだけれども、今は天界で生きている。

5 **信仰に由りてエノクは死を見ぬように移されたり。神これを移し給いたれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを証せられたり。**

「三百年、神と共に歩いた」

というあれです。神と共に歩いたから、神は彼をとって、

**「彼はおらずなりき」**

という。エノクのことは創世記5章21節。

「[21]**エノク六十五歳に及びてメトセラを生めり。[22]エノク、メトセラを生みし後三百年神とともに歩み男子女子を生り。[23]エノクの齢（よわい）は都合（すべて）三百六十五歳なりき。**

「三百六十五歳」、これはおもしろいね、一年と同じ日数だから。どうしてこんなことになっているのかな。

**[24]エノク神と偕に歩みしが神かれを取りたまいければおらずなりき。」（創世記 5・21～24）**

と。死を乗り越えてしまった。エリヤがそう。キリストももちろんそう。ただし、キリストは一辺、特別な十字架の死を通らなければならなかった。彼はいきなり天界に行けたひとだけれども。

この場合のエノクの信は凄いですよ、この信は。死を乗り越えてしまった信だから。死に打ち勝つ信だから。「神と共に」なんて言ったって、

「神のうちに」

と同じことです、この場合の「共に」は。

「神の中にあって歩んだ」

と、むしろ書いてもらいたかった。

とにかく、エノクの信はそんな凄い信です。私たちは御霊で本当にキリストの中に歩くようになりましょう。もう、相対的な

「幸の、不幸の。あの人がどう言った、こうした」

そんなくだらないことはみんなすっとんでいきます。そういうことがまだ問題になっているうちはダメですよ。何と言われたっていいじゃないか。

**[6]信仰なくしては神に悦ばるること能わず、**信なくしては本当にそうですよ。逆に、信あるところに神の本当の喜びがある。だから、

**「われ汝を悦ぶ。汝はわが愛（いつく）しむ子なり」**

と、キリストは言われた。変貌の山でも、洗礼をヨハネから受けたときも、天から声がきて、

**「汝はわが悦ぶもの、わが愛しむ者なり」**

と。わが悦にしてわが愛なりと。キリストは本当に神の中に信入しましたから、

**「われ汝を悦ぶ。汝はわが愛しむ者なり」**

と。信にあるときに、はじめて神さまは本当に悦んでくださる。

「信なきものは悦ばず」

なんて逆に読まないで、肯定的に読まなくてはいかんですよ。

**「我によらずば何ごとをも為し能わず」**

と、キリストは言ったが、

「我によれば何でもできるぞ」

と。いいですか。その逆を読んでいかなくてはダメです。

## ●慕うところは天にあり

あと、ノアが出てきたね。まぁもうよそう。あまりいろんなことをしゃべると、あなた方は食傷を起こしてしまうから。霊的食傷を起こして、下痢を起こすといかん（笑）。適当にしておかないとね。

「過ぎたるは及ばざるより悪し」

という。まぁ半分冗談ですよ。大体、16節なんてやろうとするのが無理なんだ。そのあとはこの次にするけれども、ちょっと終りのところだけ見よう。

13 **彼等はみな信仰を懐（いだ）きて死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙（はるか）に**
**これを見て迎え、地にては旅人また寓（やど）れる者なるを言いあらわせり。** 14 **斯く**
**言うは、己が故郷（ふるさと）を求むることを表すなり。** 15 **若しその出（い）でし処を念（おも）わば、**
**帰るべき機（おり）ありしなるべし。** 16 **されど彼らの慕う所は天にある更に勝（まさ）りたる**
**所なり。**

みな信仰によって死んだが、約束のものを受けなかったけれども、本当の「故郷」は天界である。

**この故に神は彼らの神と称えらるるを恥とし給わず、そは彼等のために都を**
**備え給えばなり。**

と。彼らは天を慕って歩いていた。私の兄貴が仆れた時に、藤井先生が自分の雑誌に、

**「慕うところは天にあり」**

という表題で書いてくださった。ヘブル書のこの言葉です。天を慕う。我々の魂の故郷は天界であります。それで、私はよく自分の号に「天」と付けてしまうんだ。けれども、ただロマンティックに慕っているのじゃないですよ、

**「天を慕う」**

と言っても。天は既に来ているんだから、こっちへ。天地一如の世界になっているから。天は既に来ている。私の中に。皆さんの中にも。

**「神の国は汝らのうちにあり。天国はすでに汝らのうちにあり」**
**「恵福（さいわい）なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」**

と。現実であると同時に、終末的な未来である。現実と終末的な未来とがいつも一つになっている。いいですか。だから、それを

「終末的現在」

というんです。終末的現在というのは、現在において終末の世界を持っているから。慕うところの天を既に自分のうちに持っている。

天国人なんです。私は、あなた方は、天国人、天国体です。キリストは最もそうです。

「**天国は近づけり**」

とキリストが言ったのは、

「私が天国だよ。だから、近づいて来たじゃないか」

というわけだ。全部、現（うつつ）なんです。全部、現在、現実なんです。

私は「現実」という言葉が昔から好きです、もう大学時代から。

「理想、理想」

と言われていた頃に、私は「現実」という言葉が好きだった。藤井先生は、

「理想と現実のとき、理想を選べ。現実を捨てて、理想を選べ」

と仰った。そうじゃない。理想がもう現実化するんです。そのままじゃないですよ。理想の世界は、理想の世界ですけれども、最後の「新天新地」ですけれども。その質は、質を現実に持ってなかったら、それはどこまでも観念になってしまう。理想が観念になってしまう。理想が観念でないためには、そいつを現実に持っていなければダメです。キリストの最後の新天新地を双葉の姿で私たちの中に持っていなくては。

こないだ、「二百三高地」の映画を見てきた。昭和元禄に、あの赤穂義士のような魂で生きなくてはいかん。即ち、キリストにあって十字架を負う力をいただいている。ある意味において、既に死んでいる。既に死んでいるから、本当に生きている。死生の転換をしている。十字架で既に死んでいる。義のために戦い、愛のためには担いの魂となる。それは本当の武士道には立派なものがあるね。それを本当に完成するものは福音なんです。

## ●民主主義

私はある新聞の「宗教と文化」という欄に、第6番目の「民主主義」という短文を書いた。

「日本は第二次大戦敗戦後、民主主義を国是とする国になった。民主主義は周知のごとくギリシアの政治思想に発したもので、原語の「デモクラーティア」は「デーモス」（国民、人民）と「クラティア」（統治、権力）という合成語で、日本語化しているデモクラシーは即ち、民主政体、民主制で、デモクラティズムが民主主義で、国民の在り方一般の社会制を意味することになっている。

わが国では歴史的に長期にわたり封建制が根をはり、庶民は塗炭の苦しみを嘗めながら、権勢のもと精神的に半奴隷的生活に甘んじてきた。明治維新を迎えて封建制度は崩壊したが、封建的な精神は社会の中に尾を引いていた。文明開化、国力増進とともに軍国主義的になり、日清、日露、第一次大戦と戦勝を誇ってきた日本は、限度を越えて日支事変となり、ついに第二次大戦で全面的な国の崩壊を招来した。

日本はここに明治維新とは異なった昭和維新を真剣になすべきであった。一億総懺悔は空念仏に終り、主権在民の民主主義が思想的な研究と自覚の乏しきままに急速に謳歌され、無制限な自由、無秩序な平等が知らぬまに横行跋扈し、終戦後三十五年を

経た今日、青少年から社会人にいたるまで、民主主義は身勝手主義の別名であるかのごとき現状ではないか。

たとえば、国電のシルバーシートに若い男女が平気で腰をかけて、老人が来ても席を譲ろうともしない社会相がそれを象徴している。惻隠の心なきものは人にあらざるなりと、孟子が言ったではないか。孝道師道、社会道徳が無視されるくらいなら、そんな民主主義はやめたがいい。今や、日本的民主主義はいかにあるべきか。端的に言うならば、人本的民主主義は絶対に神仏を忘れた傍若無神になってはいないか。

リンカーンがあのゲチスバークの演説で、神の下において自由の新誕生を持つべきで、国民の、国民による、国民のための政治は地上から葬り去ってはならないと言っている。この自由には責任があり、この国民平等には社会秩序がある。そして、霊法、道徳法、自然法という普遍の法に即するところに自由があり平安がある。しかも、人間相互には暖かい信愛の法があるはずだ。これが失せたら、どんな主義もだめである。」と。まぁ簡単な文章ですけれども、そういうことを書きました。「学校制度の根本精神」とか、14回までである。この次は、「お釈迦さんとキリスト」が出てきます。それから、「宗教復興」とね。

そういうことで、この、

「ピステイ」（信に在りて）

ということ。即ち、「信に在りて」は、もうひとつ主体的にいうならば、

「エン・クリスト」（キリストに在って）

です。「エン・クリスト」ということと、「ピステイ」は同じことです。では、終ります。

## ●祈り

主さま。このヘブル書11章1節、私たちは肝に銘じました。感謝いたします。どうぞ、そのような使徒たちと同じ信の現の世界を、あなたから御霊によっていただき、そして、進んで参ります。かくして、一人びとり、それぞれののっぴきならない道を歩かしめられ、その周囲に福音を証して、一人二人三人とその世界に導き入れさせてください。

あなたの福音の真理は、あらゆる文化文明の根底になければならないことをつくづくと僕（しもべ）も感じておりますが、どうぞ、若い人たちがこのことに目覚めることができますように願い奉ります。各地のそれぞれの召団が、我々、東西あいこたえて、いよいよ勇ましくこの福音のために、１９８１年は邁進して行くことができますように願い奉ります。

今、尽くしませんが、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により捧げ奉る。アーメン。